関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話(358)2271
発行人　木下和博
編集人　木下和博
(一部　10円)

天六政策の貧困とその本質
望まれる一般学生の主体性
＝二部学生の生活と権利＝

長い受験生活の後、やっと大学出来た大学というもの。おそらく誰もがその門をくぐるまでは多くの期待・大学における学問、生活等に対する憧憬や抱負を持っていたことだろう。しかし、果して現在の大学というものがそれらの期待を満足させ得る「大学」であろうか。

昨年の東大、日大闘争を始めとする全国の学園闘争に見られる如く、今や大学そのものの本質を問われている時である。そして、一般に云われる「五月危機」。新入生にとっては耳新しい言葉であるかも知れないが、新入生にとって五月は大学の現実を見る時代である。入学して一ヵ月余を経た時、大学と云うものに幾分慣れて来ると同時にその内容がわかりかけて来る。大学での学問、生活というものがどんなものであったのかと気付く者は、決して数少なくはない。それまで自分の心の中にあった大学というものが、まったく無内容な幻想しかなかったと気付かずにはおれない。そしてその現実が、殊に昼働き夜学ぶ二部学生にとっては、その二重の生活の重みと共に押しかぶさって来る問題である。

そこでいくらあがいたところで大学というものは、何も答えてはくれない。古く、資本主義体制のもとに強められ、十年一日の如く新鮮味のない講義が繰り返され、知的興味の貧困な場としてしか存在しない大学。それに加えて、われわれは、二部としての特殊な問題が限りなく存在する。これらの問題について、我々は目をそらせることは許されない。

この関大二部において、先ず、教学設備の不足、教学内容の低質さ、一般教養科目のマスプロ教育等には大学自治の形骸化という問題がある。具体的なこの様な問題に対して、我々が学生として関大二部に学ぶ以上、決して放置しておける問題ではない。

しかし、われわれはこのような問題の解決に当る時、必らず問題の本質からの追究・根本的な解決を行わなければならない。それが皮相的に、問題の本質からかけ離れた低質な物取主義的「諸要求」の一部分となってしまっては、何ら解決されたことにはなり得ない。即ち、現象的な面のみをとらえて、部分的な解決だけでは、決して大学は改革されない。

関大二部における教学の貧困の本質は、大学当局の経営主義にあるといえるだろう。日大と同様関大は「大学」ではなく、知的興品（東大等の官僚、エリート養生に対して、中堅サラリーマン養生の）を作る企業である。そこにあるものは、真の学問ではなく、産業界の型、また大学の経営主義に見合った学問である。そしてその経営主義の一つの現れとして二部の軽視という問題が出て来ている。

そして、これらの二部の貧困から生じた諸問題を、大学当局は更に二部の一部への包括というこ部合主義（＝二部の軽視、二部の中へ統合することによる経費等削減の手段）で事の解決を計ろうとして来る。しかし、我々は、二部学生として、二部学生の権利を守り、またその特殊性を無視したこれらの大学当局の策動に対して、決して屈してはならない。二部は、一部の補完物でもなければ、付属品でもない。二部は二部として独立して存在すべきものである。

我々は、二部に学ぶ以上、これらの問題に対し、真正面から対峙しなければならない。そして、これらの問題は、われわれが二部学生として学問し、生活し、即ち生きて行く上での権利の問題であり、その権利を守るという位置づけのもとに、われわれは問題を提起し解決する方向に向かわなければならない。今まさに、われわれの内に向って大学の本質を問い返さなければならない時である。

また、先年、高崎経済大学において、学生会館自治防衛闘争が行われ、真賀の数十日間、学生が学館にたてこもったが、その途中、尾瀬沼へ遊びに行こうとした学友に対して「君がいまここを去ることは、権力に屈服することであり、権力に屈するということは生きることをやめることだ。人間として生きるかどうか、存在を賞かどうかの問題だ」という問いを発した（中島誠「全学連」）。まさに、このごとく、今われわれは生きる権利を放棄するということであろう。そして、その闘いという質は、権力に抵抗して、人間として生きる権利を守り貫く為の闘いの質でなければならず、今ある問題は、自己の人間としての存在の問題である。

我々が、ここに存在しているということを、我々自身が、単に現象としてのみとらえてしまってはならない。我々がここに存在しているという時、それは、まさしくその存在というものの質を問わなければならない現実である。東大闘争において、〝内なる東大の解体〟が叫ばれたごとく、我々は自己の存在基盤を無条件に肯定することなく、また、その存在と言うことに無定形な幻想を抱いてはならない。我々は、先ず〝内なる自己の否定〟を考えねばならない。そして、その存在というものが如何に矛盾を内包しているか、その矛盾とは、如何なるものであるのかを明確にし、新たな自己を確立しなければならない。

関大二部における諸問題を見る時に、われわれは、決してそれを見過ごしにしてはならない。その中における〝自己の存在の矛盾〟というものを抜きに、単なる改良主義に先走ることも許されない。問題は明らかに抜本的な解決を要し、決して物取主義的〝諸要求〟では語ることは出来ないのである。

東大・日大・京大における学園闘争は、この関大二部にとって、決して無関係のものではなく、関大二部においても、全国学園闘争の中に叫ばれている問題があり、またその中で現出してきた問題がある。これらの内包している問題に対して、それは関大二部においては如何なるものであるのかを、自己に問い直さなければならないだろうし、こう云った諸問題に対して、自らは何をしなければならないのかと云った問題提起を、再度自らに成さねばならないだろう。我々は、常に〝学ぶ者〟として現状を分析し、真理を探究しなければならない。そして、その過程において現出して来るところの自己矛盾を明確に自己に問い、そして自らの方向性を見出ださなければならない。それは、あくまで抜本的な在業でなければならないし、根源的変革を志向しなければならないだろう。

われわれが二部学生である限り、働き学ぶ者にとって、もっとも獲得されなければならない〝二部学生としての生きる為の権利〟を追究しなければならないだろう。

手記

ある新入生の幻想解体
大学の矛盾とその質的変革の提起

今日的大学の存在そのものに対する難問の渦中にあって、われわれは自己の人間としての主体性の確立あるいは自己の存在意義を明確にすることを目的として、また何らかの目的意識を持って入学してきた。しかし、現代まさに大学という名の機関によって、われわれのそういった本来的目的が単に名目上だけのものとなり、われわれがイメージとして描いてきた大学像が幻想化され、まさに産学協同路線の路上をまい進しつづける大学の現実的姿を目の前につきつけられた。

新入生に対して、最初にまた幾度となくくり返されていわれたのは〝五月危機〟あるいは〝六月危機〟であり、それは統合なる新入生の大学に対する失望感のあらわれとしてとらえられている。大学入学と同時に誰しも味わったであろう空虚感と失望感とは、まさに今日的大学の存在に対する根本的問題点へと帰結していく。我々新入生は、そういった現実的問題をふまえて、我々の目の前に暴露された関大二部における諸問題を、現代の大学機構の矛盾点としてとらえるべきであろう。

関大二部における諸問題―例えばカリキュラム編成・時間割、あるいは講義内容等々は単に関大二部の孤立した問題ではないことはもろんのこと、我々はこの問題の所在点を明確にした上で、単なる技術的対応による解決ではなく、現代我々が学生として、あるいは労働者として、人間としていかなる存在であるのかを明確にすることを要求されているのではないだろうか。

勤労学生が社会の中でいかなる点に位置づけされているのかを明確にしたうえで、新入生の大学に対する失望感あるいは突然とした不満が単に、設備あるいはカリキュラム編成等々の〝改善〟によって解消されるかということを考えねばならないことではないだろうか。

今日的学園闘争は、まさに関大二部における諸問題と同等のものを含むものであり、学生の自己解放をめざした闘争である。その認識なしに〝学園の民主化〟なるすでに形骸化されたスローガンをかかげたものは、まさに欺瞞である。われわれ新入生が現代の大学から受けとめた不満を単に、設備等の〝改善〟ということにすりかえるようなきわめて自己欺瞞的態度をとるのではなく、今日の学内状況下の大学自身の矛盾点の明確化にまで自己の意識を上揚させる必要があるのではないだろうか。

—43年度・就職状況—

続く求人難・良好の就職率

昭和四十三年度卒業生の就職情況は、別表に見るごとくである。ほぼ例年通りであり、就職率も大体良好といえるだろう。

しかしながら、やはり大企業・中企業への就職が圧倒的多数であり小規模ながら多数ある小企業への就職者は少なく、現在のとりわけ零細企業における人手不足と関連して来ているのであろう。

学部	卒業者数	就職希望者数	決定（内女子）	就職率(%)	巨大企業	大企業	中企業	小企業	官公庁その他企業以外
二部									
法	258 (3)	51 (1)	49 (1)	96.1	1 (0)	9 (0)	7 (0)	1 (0)	31 (1)
経	253 (1)	97 (0)	94 (0)	96.9	3 (0)	18 (0)	24 (0)	2 (0)	47 (0)
文	122 (26)	52 (11)	47 (10)	90.4	1 (0)	5 (0)	9 (0)	2 (0)	30 (10)
商	167 (2)	57 (2)	56 (2)	98.2	5 (1)	10 (0)	21 (0)	2 (0)	18 (1)
計	800 (32)	257 (14)	246 (13)	95.7	10 (1)	42 (0)	61 (0)	7 (0)	126 (12)
一部									
法	838 (16)	769 (10)	746 (9)	97.0	134 (1)	218 (2)	165 (2)	13 (0)	216 (4)
経	723 (1)	666 (1)	642 (1)	96.4	129 (0)	235 (0)	154 (0)	13 (0)	111 (1)
文	660 (144)	575 (113)	522 (91)	90.8	34 (6)	119 (16)	179 (27)	42 (10)	148 (32)
商	641 (5)	585 (5)	567 (4)	96.9	90 (0)	209 (0)	160 (0)	19 (0)	89 (4)
工	810 (0)	810 (0)	809 (0)	99.9	92 (0)	265 (0)	304 (0)	19 (0)	129 (0)
計	3672 (166)	3405 (129)	3286 (105)	96.5	479 (7)	1046 (18)	962 (29)	106 (10)	693 (41)

（　）内は女子の内数を示す　(3月末日現在)

古書籍全般売買
天牛本店
淀川区塚本中町前
電話(391)3185番

WINE & TEA
関大天六学舎前に　憩の場！
SNACK 喫茶　きガール
TEL 351－9166

気軽なあなたの
金融機関
質「むかでや」
天六市バス操車場横　TEL (351) 9527

学園闘争の提起するもの

反体制・全人民的政治闘争への志向

一〇・八以降、学生運動が街頭行動として政治を拡大し、国家権力の弾圧体制のエスカレートと呼応して、それが非妥協的な対決として必然化した。東大では、昨年の一月二九日、医学部学生、青医連が医療の帝国主義的再編（登録医制）に反対して、ストに入り、6月15日時計台占拠、6月17日機動隊導入により、一挙に医学部闘争が全学的闘争として拡大した。大学の中枢的機能がマヒしたことに対して、闘う学生に対する不当大量処分という政治的弾圧には一切ふれず、物理的に排除するという権力支配の論理がいかに貫徹しているかが、日常からはぎされたところで明らかになった。そして一月、安田講堂の全共闘に対する国家権力機動隊＝大学当局の入試実施という、社会的契機という盾のもとに、学内正常化を闘争の適程や問題点を無論理で、切断するように行使したのであった。そのみにくい権力支配が先鋭的な闘争の過程で暴露されればされる程、東京帝国主義大学の実体を露呈するものであることを証明した。

東大闘争が突き出したものは何か。それは、学生主体にとって、学問とは何か、大学とは何か、根底的に問われ続けたことである。

闘争参加者個々人が、権力と資本の論理に支配された大学に身を置きつつ、自らの学問の客観的役割を追求し、学問する主体とは何なのかということを問いつつ、内的苦脳の中から新しい自己を創造していく闘いであり、権力に対する非妥協的闘争の一方で、不断の自己否定がなされ続けたことである。現実的には医学部闘争が、医療というものがいかなる社会で、いかなる情況で患者を見ることができるのか、そして患者とは何かみるとは何かを問うていくことによって、医局の解体を必然とし、体制内大学の被既的否定である。

研究者として、学生として、ブルジョアに奉仕する労働力に、また、学問・研究の所産が、その中に吸収されざるを得ない現実の社会体制に対する叛逆しか、その自己矛盾を止揚しえないのである。

それゆえ、日共・民青の現実の体制の枠内においては、学問のみが切り離されて「良い学問」「悪い学問」とか、「人民のための科学」など、科学・学問がこれ自体存在理由があるとすることは、免罪符とはなり得ないのである。

体制内大学とはブルジョアジーのための科学知識と、知的エリートの生産に過ぎしかなり得ないと認識するとき、そこにおける「学問・研究の自治」「大学の自治」は戦後民主主義のベールの中に自己保身の論理、体制奉仕の論理をまとった、大学の階級性をおおいかくす支配者の論理以外のなにものでもないのである。故に、大学権力が教育的配慮としてなす処分は、学問・研究の自由、大学の自治の侵犯しかなり得ないのである。

現体制内大学の封鎖による研究活動を停止することであり、バリケードストライキによる否定の現実化としての実力行動である。大学闘争とは運動主体における、不断の自己否定と、権力からの弾圧に対して、思想と行動の結合としての非妥協的な、実力闘争としての永続闘争である。日共＝民青と加藤執行部との十項目要求の承認という学生参加方式による大学の民主化とは、形式民主主義＝自治会民主主義で、学生の権利を枠づけし、秩序維持という名のもとでの闘う学生の排除でしかない。それは、現体制内において矛盾を殺いかくすだけでなく、そのもの自身が学生を規制する。故に彼らは入試実施を社会的要請という背景のもとに、至上命令として機動隊による闘う学生に対する大弾圧を行使したのである。

東大闘争の到達した現時点から闘争は個別学園闘争＝改良主義的闘争としては闘争が現実化せず、その闘争における運動主体である自己は、なんらかの形で加害者の側面を持ち得る。学生としての個別改良主義からの脱却としての現体制否定は闘争の発展段階なわち闘争主体の自己否定化→大学権力→国家権力を非妥協的に追求し、資本主義体制否定に至ったとき、研究者としての自己、学生としての自己を否定するときに始めて、体制否定のギリギリの主体の確立を迫られることによって、社会変革のにない手として、革命主体の創出へと問われざるを得ないのであろう。そのような展望における学園闘争とは全社会的闘争であり、アンチテーゼとしての大学を闘いの中で創造していく質的発展をともなっていくのが必然であろう。

論説

大衆不在の現状を止揚し自らの主体的組織化を

東大・日大をはじめとして全国的に展開されている個別学園闘争は、個々の大学の特殊条件や原因となった問題の形式的な違はあったとしても、それらは明らかに、学生主体から発せられたところの〝学問〟〝自治〟の本質に迫る問いかけであるし大学への幻想を打破し、その中に埋没していた自己を否定するという同時的・同質的な闘いであるといえるだろう。そしてその闘いは、まさに根底的質の変革を追究するが故に、大学当局の一方的押しつけによる〝なし崩し的妥協〟を一般教育等振興対策案」が大学当局の一方的押しつけによって反対の声が出ると〝欺瞞的延期〟即ち二年間の考慮期間を置くという保留策を出して来た。

このような、大学当局の権力（中教審）と密着した学生抑圧策動、或は未だ何ら本質的解決を見ない〝千里山移転〟問題＝二部の一部への包摂・補完物化といった問題、また全体的な問題として、教学内容の低質化・マスプロ教育・教育設備の貧困或は、体育会支配の下にある学生自治の形骸的実態といった問題があり、これらは二部大学の貧困として我々勤労学生の上にかかって来る。

これは、明らかに大学当局の経営主義から来るところの〝二部軽視〟であり、ブルジョアー政府当局と密着して、大学の〝帝国主義再編〟の一環を担うものとしてあり、それは大学当局＝教授会自治＝体育会自治として我々学生を支配し、学生に対する抑圧と抑圧のあらわれであることを、われわれは明確に認識しなければならないだろう。

そしてまた、今回の自治委選挙に現出されたごとく、大学の自治は体育会＝民青の暴力的勢力抗争によって歪曲され、そこには、まったくわれわれの学生主体の存在はないという情況である。しかし、大学自治は、教授会自治ではないことはも論〝体育会が民青か〟といった内容でもないことは明白であろう。に二部学生の生活・権利を確立しなければならないし、またその過程でえた質を、同時的、同質的に個々の職場へ持ち帰り、労働者としての生活、権利の奪取へ向けての闘いも、主体的に志向しなければならないだろう。

当面、我々に課せられた問題として、明らかに体育会・民青の〝帝国主義再編〟の一環を担うものとしてあり、それは大学当局＝教授会自治＝体育会自治として我々学生を支配し、学生に対する抑圧と抑圧のあらわれであることを、われわれは明確に認識しなければならないだろう。

そのための、学部・学科・クラス・サークルを基軸とした〝研究会〟〝闘争委員会〟の形成を早急に行わなければならない。

われわれの持つ、学生＝労働者という勤労学生の特殊性を認識し、その弱点を克服し、真の〝なかわらず〟体育会民青かの〝といった内容でしかなければならないし、またその過程でえた質を、同時的、同質的に個々の職場へ持ち帰り、労働者としての生活、権利の奪取へ向けての闘いも、主体的に志向しなければならないだろう。

われわれはこういった情況の中において、われわれ学生主体に基づく自らの組織形成を急がねばならない。

関大二部に現出しているこの諸問題に対して、学生自治の体育会支配を突破し、全学＝民青による大衆欺瞞的〝諸要求貫徹闘争〟を乗り越えるものとして、自らを主体的に組織し、体育会から民青かではなく新たな質による闘争を展開して行かなければならない。

4・26全関西労学総決起集会（京都）

―機動隊の暴力的弾圧激化―

四・二六全関西労学総決起集会が、四・二六安保粉砕・沖縄闘争勝利に向けて、四月二六日、京都・円山公園野外音楽堂において約四〇〇〇名の労働者・学生・高校生によって行なわれた。

それに先立ち、同日午後三時頃より、京都大学において学生独自の集会がもたれ、また同志社大学においても、集会が、一部民青系の妨害の中で行なわれた。その後、同志社大学に結集した学生約五〇〇名は、京都大学までデモ行進し、京都大学における集会に合流した。各セクト毎に意志統一した後、午後五時過ぎ京都大学を出発、デモ行進により、円山公園野外音楽堂にて行なわれる集会に結集した。労働者、学生各二〇〇〇名、高校生約二〇〇名計四〇〇〇余の大集会であった。

四・二六集会は、沖縄デーである四・二八闘争を七〇年安保、七〇年代階級闘争の突破口とするという意志一致のもとに行なわれ、主催団体・参加団体の挨拶・声明・意志表明が成されて。その後、午後八時過ぎから円山公園＝河原町通＝京都市役所前のコースでデモ行進が行なわれたが、圧倒的な権力＝機動隊の無の不当弾圧によって、理由もなくデモの隊列が数回に渡って崩されたり。また、私服警官、公安の増員や、機動隊員によるデモ隊への個人テロが繰り返され、数十名の労働者、学生が機動隊の暴力により負傷、また十八名の学友が不当逮捕された。

これらの暴行や逮捕（逮捕は、明らかに四・二八闘争への参加者の削り取り、また活動家を四・二八当日留置しておくことを意図しており、四・二八闘争に参加する労働者・学生の消耗のみを目的とした、まったく理由のない、また権力を露骨にむき出した不当弾圧である。

一方、同志社大学においては、すでに四月二六日から五月一日までの一週間、スト権が確立されていたが、一部民青系及び体育右翼系学生が野合し、不当にも、多くの学友が円山公園の集会に出ている隙をねらって、根拠のないスト権無効を主張し、学友会中執委員長志賀君を長時間に渡って監禁し恫喝によって、スト権無効を強要しようとした。しかし、志賀君はこうした恫喝・正当な権利への弾圧にも屈せず、最後まで委員長としての、多くの学友に対する責任を貫いた。

この日見られた如く、権力による反動的再編は露骨に進められ、また、まったく無内容な低質さで秩序を称え、それによって一般学生に対し底辺的な裏切りを繰り返す反動的・反革命的日共＝民青及び右翼＝体育会の策動は、決して部分的なものではなく、また、同志社大学においてのみ存在する問題でもない。即ち、こういったことは、明らかにこの関大二部においても存在する問題であり、われわれは、早急に自らを明確に位置づけ、また、自らを主体的に組織する必要に迫られていることを認識しなければならないだろう。

社告

新報社員募集

激動の社会情勢の下、今我々は、自らを形成する必要に迫られている。

主体的に、新聞製作・理論活動に参加する意欲ある一、二年生の来社を乞う。

地下BOXまで

関西大学　新報社

―お詫び―

四月十五日、五月十五日発行予定の、当「関西大学新報」第二〇七号・第二〇八号が、取材等の都合により、予定より相当遅れましたことを、ここにお詫び申し上げます。

尚、印刷等の都合もあり、第二〇七号・第二〇八号は合併して発行致しました。

教科書・参考書はお揃いですか？

あなた自身の学問の充実を！

書籍・文房具・事務用品

関大生協外販部天六